



市議会議員選挙で 緑の党が初めて第一党に

9月12日に地方選挙があり、私が暮らすハノーファー市（人口53万人）で大都市として初めて緑の党が第一党となった。2年前には初の緑の党の市長が誕生しており、着々とエコロジカル路線を走っている。

ドイツでは首長選挙は7年ごと、地方選挙は5年ごとに実施される。国政ではキリスト教民主同盟（CDU）と社会民主党（SPD）の二大政党が交代で政権を担ってきた。CDUはメルケル首相、SPDはシュレーダー前首相を擁する。

そんな中、ハノーファーは長らくSPD一強で、緑の党と連立政権を組んできた。だから2年前、緑の党のベリット・オナイが当時38歳で市長となった時は、驚きの声が上がった。しかも、トルコの出稼ぎ労働者の息子だからなあさらである。

今回の市議会選挙では、緑の党が11.5%増やして27.8%を獲得し、0.2%という僅差でSPDを上まわった。気候保護運動が高まり、プラスチックが大きな問題となり、地球レベルの問題が山積していると多くの人が感じているからだろう。ちなみに投票率は51%で、前回とほぼ同じだった。

市議会議員は64人で、そのうち女性は19人。緑の党の議員は18人で半分の9人が女性だが、他党は男性が多い。男女平等なのも緑の党の特徴。人権に配慮し、経済より市民の権利を重視するという印象がある。

例えば市中心部の都市計画について、気候変動や自然、社会平等、交通などさまざまな分野において市民の意

見を取り入れようと、2020年末から実験的な取り組みをしている。「街中心部ダイアログ（会話）」というプロジェクトで、「もしそうなら…」を合言葉に、道路や駐車場、教会前の広場を緑化し、ベンチや遊具を設置して、人々がゆったりと時間を過ごせる空間をつくった。

オペラハウス前にはサーフィンができる簡易プールを設置し、手作りアイスクリームや自家焙煎のコーヒーの屋台が立った。また、大雨と猛暑についての展示をし、年々異常気象となっていることを視覚化した。このように都市空間に変化を加え、人々に意識してもらうことで、街と市民への変化について考える機会とした。

7月には22日間、ハノーファー駅裏の高架道路から車を締め出し、アート会場とした。温暖化ガスを排出する車社会へ疑問を呈した決断だが、交通量の多い道路を閉鎖することで渋滞を引き起こすと反対意見も多かった。場合によっては選挙で緑の党は票を減らすのではないかと危惧されたが、反対に増やした結果となった。

市中心部はすでに歩行者天国となっているが、もっと範囲を広げるべきだと気候保護活動「未来のための金曜日」の若者たちは主張しており、市内の自動車走行を時速30キロ以下にするよう求めている。

市は市中心部から市外に伸びる三つの道路を、今後3年間試験的に時速30キロに制限すると決めた。騒音や排気ガスの減少、自転車の増加など期待する効果が出れば他の道路にも実施する考えだ。



昨年初め、オナイ市長と記念撮影。
週刊金曜日に市長の記事を書いたの
で、掲載誌を手渡しました

このように緑の党の市長のおかげで新たな取り組みが実施され、議会第一党となつたことでこの傾向はいっそう強まるだろう。その一方で「時速30キロに制限すると、車が市内に留まる時間が長くなり、排気ガスがかえって増える」「経済をないがしろにしている。規制が厳しすぎる」との批判もある。

ハノーファーでは「未来のための金曜日」の気候保護活動が盛んだが、今春から若者有志が市庁舎横の芝生で「気候保護キャンプ」をしている。自分たちが求める気候保護の目標を市が実行するまで（例えば2025年）、テント生活をするのだという。キャンプはブレーメンなど全国11都市に広がっており、気候危機対策の即時実行を求める若者たちの行動力は底なしである。

追伸：9月26日は国政選挙。緑の党の女性アンナレーナ・ベアボック（40歳）がメルケル首相の後任に立候補している。劣勢といわれているが、どうなるか。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

明は9月から9年生（日本でいうと中3）になります。明のクラスでも緑の党は人気のようで、明に「なぜ緑の党が伸びている

と思う？」と聞くと「昔と違って、今はインターネットで情報が入ってくる。今的人は環境や気候危機について、その理由をしっかり理解している」と言います。



確かに子どもたちは学校でSDGsや海洋汚染について学び、気候危機に関するニュースを耳にし、気候デモに参加しています。ベジタリアンが多い（特に女の子）のも特徴です。そう考えると、緑の党が伸びているのは時代の流れか。長らく経済優先だった政治に揺れ戻しがきているように感じます。明も「18歳で投票できるようになったら、絶対緑の党に入れるんだ」と今から張り切っています。